

令和元年5月18日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03077

研究課題名(和文) 10-13世紀の中国西南地区における民族間関係

研究課題名(英文) Inter-ethnic Relationships in southwestern China in the 10-13th century

研究代表者

林 謙一郎 (HAYASHI, Kenichiro)

名古屋大学・文学研究科・准教授

研究者番号：20294358

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：宋代(10～13世紀)の中国雲南地方に存在した大理国に関する史料記述がなぜこれほどに少ないのか、当時の中国王朝と大理国との関係はどのようなものであったかという問題について、本研究では宋代の漢文文献を中心に分析を進めた。その結果、この時期には宋朝と雲南地方の中間地域に位置する諸民族集団が、しばしば前代までに雲南地方で用いられた地名・官職名を使って宋朝と交渉を行っており、それが宋朝と大理国の直接の通交を阻む要因として働いたことを明らかにすることができた。この現象を本研究では宋代雲南の「仮想化」と名づけ、これによって上記の史料記述の乏しさを少なくとも一面から説明できることを主張する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

宋代雲南に関する史料の乏しさは西南中国の通史を記述する際の大きな障害になってきた。本研究の成果はその乏しさをただちに補うものではないが、そのような状況をもたらした原因のひとつを明らかにしたことにより、今後の研究に新たな基礎を提供するものである。世界史教科書にも大理国は登場するが、これまでその意義についてほとんど説明されておらず、学習者の歴史理解の妨げになっている。本研究の成果は、この大理国が当時置かれた状況の一端を説明するものでもある。

研究成果の概要(英文)： The lack or scarcity of the description of the Dali kingdom in the 10-13th century Yunnan is one of the major questions on the history of Southwest China. This study examines the cause of this scarcity through the analysis of the articles in the Chinese source written in the Song period, and reveal the fact that in this period several ethnic groups that lived in the marginal zone between Song and Yunnan often call themselves using the placename of title that had once used in the Yunnan area during the Tang period. Song officials, especially in the border area, also tended to treat them as representing "Yunnan", as a result, direct connection between Song and the real Dali Kingdom scarcely occurred. this study suggested this phenomenon can be called as the "virtualization" of Yunnan in the Song period, and it can explain the scarcity of the description at least from one aspect.

研究分野：中国民族史

キーワード：大理国 宋代中国西南 民族関係 民族分布

1. 研究開始当初の背景

本研究が対象とする10-13世紀、すなわち北宋・南宋の両代は、中国西南非漢民族の歴史にとっては一種の「空白時期」のように見なされることが少なくない。他方で、近年ユーラシア各地の歴史研究において、近世（Early Modern）の重要性に対する注目が高まり、それにもなつて内藤湖南の唐宋変革論が改めて評価されていることはいまさら言うまでもないが、こうした状況は中国西南に隣接する東南アジアについても例外ではない。近年この領域に関して積極的に研究を行っている Geoff Wade, Sun Laichen らの編んだ『15世紀の東南アジア』（Southeast Asia in the Fifteenth Century）は副題を“The China Factor”とし、東南アジアの近世を特徴づける諸要素の多くが宋代の中国に起源を持つことを指摘している。ところが、その中においてすら Sun Laichen が「宋朝は東南アジア大陸部（Sun の言う東南アジア大陸部は中国西南を包含する）にほとんど影響を与えなかった」と述べているのは、上に述べたような宋朝の西南に対する消極性、不介入の態度を念頭に置いたものであろう。

しかしながら内藤湖南の唐宋変革論、およびそれを承けた宮崎市定の「東洋的近世」を特徴づけるもっとも重要な要素のひとつが、国家や社会の編成原理において、政治的・礼的秩序が卓越する時代から経済的秩序が卓越する時代への転換であったことを念頭に置いて、アジア南方におけるその現れの一つがいわゆる「南海交易」の盛行であるとするならば、宋朝の中国西南および東南アジア大陸部に対する「領土的」支配に対する関心の薄さ、またはこれらの地域の政権との政治的（冊封・朝貢）関係に対する消極性をもって、ただちに宋朝がこれらの地域に「ほとんど影響を与えなかった」と断じるのは、いささかバランスを欠くといわざるをえない。

2. 研究の目的

そこで、このような唐宋間の社会形態の変化を十分に踏まえた上で、中国西南非漢民族の民族間関係について考察することが、上に述べたような西南非漢民族の通史における「空白時期」を埋めるためにも、また宋朝と東南アジア大陸部との関係を正当に評価するためにも必要とされる。ここでいう民族間関係とはもちろん、宋朝と大理国のような中央王朝と西南民族の地方政権との関係だけでなく、西南民族の諸政権・諸集団相互の関係をも包含する。そして政治的関係よりも経済的関係を重視するというとき、この地方の前近代の経済活動、通商交易の基本が「馬幫」による中継交易であったことが意識される。それと同様に、二者間の関係は、たとえ中央王朝と地方政権の関係であっても、直接の使者の往来よりもむしろ中間に複数の「周辺民族」が介在するありかたこそが主流であったと考えられ、その意味で中継地ないし緩衝地帯としての現在の四川南部・広西・貴州の諸民族の重要性が意識される。

本研究の出発点においては、雲南の大理国と宋朝との関係を軸に、それに介在する四川南部（北宋時期）、広西西部（南宋時期）の諸集団について検討するという視角から分析を開始することを予定している。しかしこのことは、後者の諸集団の重要性が二義的であることを表明するものではない。彼らの「周縁性」を過度に強調することは、結局のところ中央王朝対周辺民族という見方から抜け出せなかった過去の多くの非漢民族研究と同じ轍を踏むことになりかねないからである。

むしろ彼らは元代以降には強大な土司勢力となって中央王朝を悩ませるとともに、雲南と中国内地を結ぶ幹線が四川南部経由から貴州／広西経由に遷移するという中国西南地方史にとってきわめて重大な変動を引き起こす原因となったのであるが、そのことと宋代における彼らの動向との間にどのような関連があるのかという問題に対する見通しを得ることも、本研究の目標のひとつである。

3. 研究の方法

本研究は、基本的には文献史料にもとづく研究である。具体的な方法としては（1）10-13世紀の中国西南民族に関する文献史料を網羅的に収集する。（2）経済交流の行われた交通ルートや博易場などの重要地点に関しては、可能な限り現地を訪問して地理的環境などの調査を行う。（3）これらの資料にもとづいて、同時期の中国西南における民族間関係について考察をおこない、これを当該地域の研究者との討論を通じて完成に近づける という手順を踏む。

まずは当該時期に関する文献史料を網羅的に収集する必要があった。ここで言う文献には、

- （1）宋代・元代に編纂された史書・地理書
- （2）1970年代以降、雲南省・四川省・広西省で発見された碑刻
- （3）同時期に関する中国人研究者の研究論文・著作

などを含む。このうち一次史料となる（1）（2）については活字本、影印本で入手可能なものの多くはすでに手許にあったため、それを基礎として近年新たに出版されたものを中心に収集をおこなった。碑刻についても主要なものは『中国西南地区歴代石刻匯編』『大理叢書・金石篇』などに収録されているが、出版された時期の技術的制約もあり、収録された拓本の図版がほとんど判読できないものも多いため、重要な碑刻についてはあらためて現物を確認する必

要があった。

そこで初年度においてはまず、収集の必要な文献を選定するための予備調査をおこない、その後、予定では8-9月におよそ3週間をかけて中国雲南省に資料収集のための出張をおこなった。この出張においてはまた、本研究が対象とする地点、とくに当時の博易場など交易ルート上の重要地点に対する予備調査を試みた。また同年10月には中国湖南省で開催された学会（中国土司制度と土司文化国際学術研討会）で研究発表をおこなうとともに、まさに宋代の中央政権と雲南地方を結ぶ線上に位置する同地方の地理や交通などの状況について知見を得た。

これと並行して、各史料に対する分析を開始する。冒頭でも述べたように有効な一次史料の絶対量は決して多くないため、その全てを電子テキスト化することが可能であると考えられる。電子化が完了した史料については、申請者の運営するウェブサイトにおいて順次公開しつつある。

第二年度以降も、初年度の予備調査および文献調査の結果にもとづいて、訪問可能な地点について実地調査をおこなうこととした。平成29年度においても、8-9月に雲南省昆明市の雲南大学、雲南民族大学において学術交流をおこなうことができたが、同年11月に予定していた四川省綿陽市への訪問に関しては、本務校の業務と重なったため実施を見合わせざるを得なかった。最終年度においては7月に広西師範大学で開催された学会（全球史視野下的嶺南研究国際学術研論会）において研究発表をおこなうと同時に、桂林地区に残された宋代西南との交通に関する碑文の実地調査をおこなった。また8-9月には雲南大学、大理大学を訪問して学術交流および研究発表をおこなうとともに、大理州南部、弥渡県の唐代（南詔国時代）城址を見学するとともに、同地方における碑文研究に関する情報を収集することができた。

最後に、最終年度までの研究で得た知見をもとに、令和元年5月に雲南大学において開催される学会で研究報告をおこない、その内容は現地では出版予定の論文集に掲載される計画である。

4. 研究成果

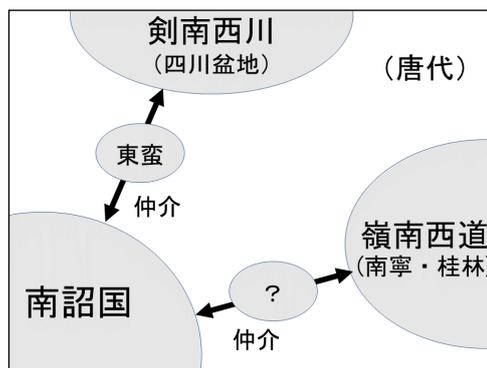
本研究によって明らかにすることのできた事柄は以下のとおりである。

宋代雲南に存在した大理国については、『宋史』外国伝に伝があるが、わずか600字にすぎず、北宋末・宋朝初の大理国から宋朝への入貢に関する簡略な記載がみられるにすぎない。『宋会要』『続資治通鑑長編』および『桂海虞衡志』『嶺外代答』などにより、若干の補足は得られるが、宋史列伝に記事の大部分は、馬の交易についての記事であり、当時の雲南内部に関する具体的な情報はほとんど得られない。大理国に関してはその統治体制・典章制度はもとより、国王（皇帝）の系譜さえ、大部分は明代以降に編纂された史・志書によらざるを得ない（最も早いのは元李京の『雲南志略』総叙）。

なぜ宋代の雲南に関する同時代史料がこれほど乏しいのか。その最大の要因が宋朝の対外関係に対する消極性にあることはいうまでもないだろう。（より正確に言えば、北辺・西北に常に大きな軍事的・政治的課題を抱えていたため、対大理国関係に対して振り向ける力量が十分ではなかったといえる。）また、唐末の混乱に対南詔国関係が与えた影響にたいするやや過剰な評価が、宋朝の雲南に対する警戒心をより高めたことも確かであろう。

しかし、ここで私が提起しようとするのは、これらとはまた異なる理由で、宋朝が、あるいは宋代の中原人士が雲南／大理国内部の実情に接することが困難な状況が存在したのではないかと、ということである。

唐代においても西南地区に設置された行政府（南詔国成立後の時代においては、成都の劍南西川節度使、邕州（南寧）の嶺南西道節度使）と雲南地方の中間地域に分布する諸民族集団の存在が知られており、その代表的な存在である四川南部の「東蛮」諸部族は、貞元年間（8世紀末）の南詔国の唐朝への再帰順の過程においても両者の仲介として重要な役割を果たしたことが知られている。嶺南西道方面においては、川南における東蛮ほど顕著な集団は見られないが、南詔軍の安南都護府攻撃や、そのごの邕州への転進に際して、現地に分布する民族集団が果たした役割は決して小さくない。



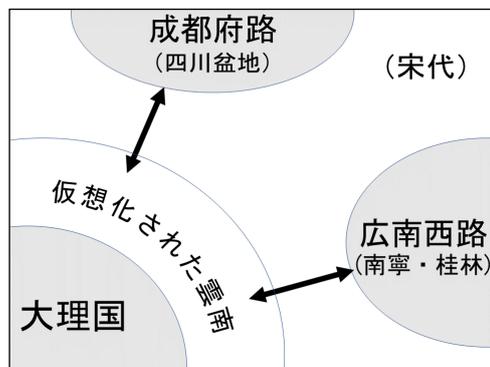
これが宋代になると、宋朝と雲南の境界地域である今の貴州／広西西部・四川南部の諸民族集団が、宋朝との交渉の際に、かつて唐代（あるいはそれ以前）に雲南地方で用いられていた地名・称号をしばしば自称していることが史料から確認される。すなわち、かれらはあたかも自ら雲南地方の一勢力であるかのようにふるまうことによって、自らの権威を高めようとしていたと考えられ、宋朝の側、とくに辺境の地方官は、彼らの地位を承認し、彼らの自称する雲南地方の地名を冠した羈縻州などの職名を承認することで、ある意味（間接的に）宋朝と雲南との通交が遂行されたとみなしていた形跡がある。このようにして宋朝から与えられた地位を保全するために、周辺民族集団は宋朝が直接大理国と接触することは決して望まなかったであろうし、宋朝側にそのような交渉をおこなう意図も、力量もなかったと思われる。このように、緩衝地帯の諸民族が雲南の地名や職名を帯び、宋朝に対して雲南としてふるまうという現

象を、本研究では仮に「仮想化された雲南」と名づけ、これこそが宋代中国本土と雲南大理国に直接の交渉がほとんど発生しなかった大きな原因のひとつではないかという観点を提出したい。

『宋史』や『宋會要』の黎州諸蛮条には「大雲南」「小雲南」の呼称がみられる。このうち「大雲南」が今の雲南を指すことは疑いないが、「小雲南」が具体的にどこを指すのかは明示されていない。しかしこのような観点からすると、「小雲南」とは、宋朝人が直接接触できない「大雲南」＝大理国への門戸としての、こうした民族集団の住地を指したものと見なせる。そして大理国への門戸を称する民族集団が当時の黔西・川南には少なからず存在したことが、現在に至るまで「小雲南」を一箇所に固定できない理由なのではないだろうか。

11世紀半ばに儂智高が大理国に逃げ込み、大理国が彼を匿う形になったことが、宋朝の大理国に対する隔意をさらに高めることにもなり、大理国は「外国」として、独立したベトナム李朝やビルマのパガン朝と同列に置かれるに至る。しかしこれは決して伝説に言う「宋皇帝が玉斧を振るって」雲南を切り捨てたわけではなく、また大理国が中国王朝の影響から離脱を企てたわけでもなく、北宋初年以來、(かつては「通道」「仲介」にすぎなかった)黔西・川南地区の民族集団が勢力拡大を続け、あらたな「边疆」を形成した結果、相対的に雲南と中原との(政治的・心理的)距離が広がったというに過ぎない。後代その距離を埋めたのはモンゴル軍の機動力であり、明清中国の人口爆発であったが、そのいずれの条件も持ち合わせていなかった宋朝は、黔西・川南の提供する「仮想的な」雲南への門戸に接することで満足するしかなかった。『宋史』の中国西南民族居住区域に関する記載が、西南溪峒諸蛮(蛮夷伝一～二、巻493～494)、西南諸夷・黎州諸蠻等(蛮夷伝三～四、巻495～496)、大理・交趾(外国伝四、巻488)と三層構造になっているのも、まさにこの状況を反映しているものと考えられる。

なお、本研究において『続資治通鑑長編』を補完する編年史料として数種の編年史料の記事を検討する過程において、これまでその時期および意義について夙に疑問視されていた北宋末の大理国の入朝の経緯について、蔡京の主導した同時期の「開辺」との関係、および蔡京の失脚による政局の変化との関係が明らかになった。これもまた、従来の西南民族史・民族関係史においてはほとんど指摘されていなかった事実であり、研究代表者は準備ができればこれに関する専論を発表する予定にしている。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 5 件)

- (1) 林 謙一郎「西南夷-南蛮-西南諸夷：中国歴代正史中有關南方民族称呼変遷」紀念江応樑教授誕辰 110 周年学術研討会(雲南省昆明市, 2019 年 5 月)
- (2) 林 謙一郎「被“虛擬化”的宋代雲南?—《宋史・蛮夷伝・西南諸夷》的再研討」全球史視野下的嶺南研究国際学術研討会及第六届中国中古史前沿論壇會議(中国広西壮族自治区桂林市, 2018 年 7 月)
- (3) 林 謙一郎「『西南夷列伝』の再検討」名古屋大学東洋史研究会大会(名古屋市, 2017 年 5 月)
- (4) 林 謙一郎「西南夷列伝・滇国伝的再研討」中国土司学高層論壇(中国湖南省吉首市, 2016 年 10 月)
- (5) 林 謙一郎「雲南白族与湖南白族的民族認同浅析」第六届中国土司制度与土司文化国際学術研討会(中国湖南省永順県, 2016 年 10 月)

〔図書〕(計 1 件)

- (1) 大理州白族文化研究院(編)『白族族源新探』(昆明・雲南人民出版社, 2016 年 9 月) pp. 528。(うち林の執筆分：p. 289～352)

〔産業財産権〕

該当なし

〔その他〕

ホームページ等

(1) 「雲南・東南アジアに関する漢籍史料」

<https://toyoshi.lit.nagoya-u.ac.jp/maruha/kanseki-j/>

本研究の一環として作成した漢籍史料の電子テキストを公開している(一部は今後公開予定)。

6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。